

研究課題：フレイル，オーラルフレイルおよび食行動に関する横断的・縦断的研究

研究者名：市川哲雄¹⁾，中道敦子²⁾，石田雄一¹⁾，後藤崇晴¹⁾，柳沢志津子³⁾

所属：¹⁾ 徳島大学大学院医歯薬学研究部口腔顎顔面補綴学分野

²⁾ 九州歯科大学歯学部口腔保健学科

³⁾ 徳島大学大学院医歯薬学研究部口腔保健福祉学分野

【背景と目的】

フレイル，オーラルフレイル，食行動に着目し，高齢者自身が自覚するフレイル，オーラルフレイルの兆候と食行動の変化の実態をアンケート調査で検討した。

【方法】

フレイルに関連する質問項目として，体重，疲労感，握力，活動量，歩行速度に関する 5 項目を，オーラルフレイルに関連する質問項目として，咀嚼や嚥下機能に加えて，残存歯，唾液，舌の機能に関する 7 項目を設定した。質問項目は 4 段階で評価させ，得点が高い程度虚弱傾向が強くなるように設定した。

食行動については我々が開発した Y N 式食行動質問票を使用し，サブカテゴリー「食認知」，「食生活」，「摂食行動」を各 6 項目，計 18 項目で評価した。

対象は，病院歯科・歯科診療所通院患者，講演会参加者および施設職員と家族とし，40 歳以上で 1214 名の回答を得た。本研究は徳島大学病院臨床研究倫理審査委員会の承認（承認番号：2404）を得て行った。

【結果】

フレイル関連項目は，50～60 代で一旦減少した後，再度上昇するパターンを示し，50 代，60 代，70 代においては男性よりも女性の得点が有意に高い値を示した。筋力低下，歩行速度の低下を示す得点は年齢の上昇とともに高くなる傾向が認められた。

オーラルフレイル関連項目は，男性で 50 代，70 代，90 代でわずかな得点の減少はあったものの，年齢の上昇とともに一様の増加傾向を示した。とくに歯が悪いこと，唾液，食べこぼしにはその傾向が強くと認められた。食行動については，「食認知」の得点はほぼ年齢変化は認められず，「食生活」「摂食行動」は，40 歳以降で徐々に減少し，適正な食生活の方向に推移した。

【結論】

40 歳以上の各年代のフレイル，オーラルフレイルおよび食行動に関連する兆候を調査し，各年齢におけるフレイル，オーラルフレイル，食行動の兆候を明らかにした。